

# 研究ノート

## 野球競技における指導者のタイプとチームの特徴の関係

### － 中学生・高校生年代の指導者に着目して －

藤 田 依久子<sup>1)</sup>・野 本 堯 希<sup>2)</sup>

Ikuko Fujita・Takaki Nomoto

- I. 序（指導者評価尺度の必要性）
- II. 目的
- III. 研究1（指導者評価尺度の作成）
- IV. 研究2（指導者評価尺度とチームの特徴との関係）
- V. 本稿の課題
- VI. 今後の展望と日本スポーツ界への貢献
- VI. まとめ

### 要旨

本稿の目的は野球競技の中学生・高校生年代の指導者評価尺度を作成し、チームの特徴との関係を明らかにすることであった。A大学野球部101名にアンケート調査を行った結果、「専門性」、「人間性」の2因子からなる指導者評価尺度が生成された。生成された尺度は中学生においては競技成績との有意な関係が認められた。また、チーム力や選手の人間の成長、部活動の満足度とも有意な関係が認められた。

キーワード：評価尺度、指導者、チームの特徴、中学生、高校生

### I. 序（指導者評価尺度の必要性）

日本において野球は国民の人気競技である。平成7年は8,558,000人であった15歳から19歳の人口が平成25年には6,047,000人になるなど少子化が進む中（総務省統計局、2015）、高校野球の競技人口は平成26年にはここ30年で最多の170,312名に到達するなど依然として高い水準を保っている（公益財団法人日本

高等学校野球連盟、2015）。野球は人気競技であると同時に国際的にも高い競技力を保持している。日本代表チームは2006年、2009年に開催された野球の世界大会であるワールドベースボールクラシック（WBC）<sup>3)</sup>において2連覇を達成した。2013年大会では惜しくもベスト4で敗退したが、3大会連続でベスト4以上の成績を残しているのは日本だけである。2013年には、2020年の第32回夏季オリンピック競技大会<sup>4)</sup>が東京で開催されることが決定し、オリンピック開催に向けて様々な事柄が議論されている（高ら、2015）が、その中の一つとして野球・ソフトボール競技の復活も検討されており、野球界は盛り上がりを見せている。また、リトルリーグ世界選手権大会では2012、2013年と連続で日本代表が世界一になるなど、日本野球界からは若年層から世界の舞台で活躍する選手を数多く輩出している。近年、世界大会が大学生、高校生、中学生年代でも開催されるようになり、今後

3) WBCは4年に1度開催される、国際野球連盟（IBAF）公認の野球の世界一決定戦のことを指す。次回は2017年開催予定。

4) 国際オリンピック委員会（IOC）が開催する世界的なスポーツ大会のことを指す。オリンピック招致合戦の際に日本をアピールするために使用した「おもてなし」という言葉が流行し、ホスピタリティマインドの醸成が話題となっている（藤田・吉井、2013・清水、2004・服部、2008）。

1) 静岡産業大学総合研究所研究員・応用心理学研究センター運営委員会委員長

2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科コーチング学専攻、静岡産業大学経営学部兼任講師、静岡産業大学応用心理学研究センター研究プロジェクト調査研究協力者

ますます若年層における選手強化の必要性が増している。

一方で若年層からの競技への傾倒は、将来のスター選手の輩出につながるという正の面だけでなく、燃え尽き症候群や競技引退後のセカンドキャリア（吉田、2008・高橋、2011）の問題に代表されるように心理的・社会的な問題を引き起こす負の面が存在することも忘れてはいけない。このような問題を引き起こさないためにも、トップアスリートを育てるためにも適切な指導を受けることが求められる。しかし、少年野球では、発育発達段階を考慮しない勝利至上主義や競技志向傾向（藤原、1989）やジュニア期における過度なトレーニングや投げ過ぎによる障害や燃え尽き症候群などの弊害が多発している状況が報告されている（植屋ら、1990）。また、中学生・高校生以降になると主に教員が学校部活動の中で指導にあたっており、指導者養成のプログラムは確立されていないため、自分の経験のみに頼った指導が行われている。

近年では、川村（2014a、2014b、2015）によって、バイオメカニクスなどの科学的手法を用いて野球の技術を解明した上で、現場の指導に活用できる指導書なども発行されるようになってきた。しかし、馬見塚（2012）は、約半数の小学校5年生は肘の障害を持っていると指摘しているなど、未だ指導現場に科学的・医学的な知識が普及しているとは言えない。また、2013年には部活動顧問からの体罰により部員が自殺するといった事件が起き、指導者の資質が大きな社会問題として取り上げられるようになった。文部科学省も暴力に頼らない、「新しい時代にふさわしいスポーツの指導法」の確立に向けて動きだしている（文部科学省編、2013）。しかし、野球界においては、指導者養成の必要性は論じられるようになって、具体的な動きはまだ起きていない。その要因として、川村（2013）は多くの組織団体の乱立する野球界の構造や体質を指摘している。現在は、その圧倒的な競技人口を背景として自然淘汰の競争選抜により競技力を維持することができているが、今後もさらなる少子化が続くことや他競技への人口流入が増

えてくると現在の国際競争力を維持することは困難になる可能性も否定出来ない。これらのことから野球競技において適切な指導力を持った指導者の養成は急務であると考えられる。

野球の指導者に関しては、投球動作や打撃動作の指導における着眼点の研究（松尾、2009・松尾ら、2010・金堀、2010）、現役時代の守備位置と指導力の関係に関する研究（藤森、1992）が行われている。野球が団体スポーツであることを考えると、指導者は個人の動機付けが集団のパフォーマンスに与える影響（武田ら、2011）を考慮して指導する必要があり、そのためには情報管理やコミュニケーションスキルが求められる（田中、1969・田中、2002）。しかし、コミュニケーションの双方向性を重視した発想の研究は行われていない（平野、2000）。また、動作の指導においても心（精神面）と身体面のつながり意識した学習プロセス（藤田、2009・藤田、2010）を考慮した指導が求められる。今後、指導者養成のプログラムを作成していくにあたっては、動作だけ、心（精神面）だけといった断片的な指導ではなくトータルで指導行動を評価できるような評価尺度を作成していくこと（小方、2003）が求められるだろう。現在、指導者を評価する尺度は、Chelladurai & Saleh(1980)らが作成したスポーツ版リーダーシップスケール（LSS）やSmith, Smoll, and Hunt(1977)らが作成したCoaching Behaviors Assessment System（CBAS）などが使用されており、アメリカではSmith, Smoll, & Curtis(1978)らがCBASを使用し、リトルリーグのコーチを対象にした研究を行っている。しかし、文化的な違いや教育現場で教師による指導が行われていること（鎌原ら、2012）を考慮すると、日本独自の指導者評価尺度の開発が必要であると考えられる。

## II. 目的

本稿では、研究1において、中学生・高校生年代の野球競技における指導者の能力を測定できる尺度を作成し、その信頼性及び妥当性を検討する。次に、研究2において、指導

者評価尺度によって得た結果とチームの特徴との関係について検討することで、中学生・高校生年代の指導者として求められる能力を明らかにすることを目的とした。

### Ⅲ. 研究1

#### 1. 目的

研究1では、指導者の特徴に関する質問紙調査から中学生・高校生年代の野球競技における指導者評価尺度を作成することを目的とする。

#### 2. 方法

##### (1) 調査協力者

2012年10月現在、A大学野球部に所属する野球選手101名（平均年齢20.28歳±1.34、全て男性）である。

##### (2) 調査時期・手続き

A大学野球部の監督に事前にアンケート調査実施の許可を得た上で、2012年10月に集団法で実施し、その場で回収した。

##### (3) 質問紙の作成

###### 1) フェイスシート

対象者の付帯情報として、性別、年齢、競技歴、所属チームの種別（学校の野球部・地域の野球チーム・その他の野球チーム・野球部に所属していない）について記入を求めた。

###### 2) 指導者の特徴に関する質問紙

指導者の特徴について問う15の質問項目を作成した。具体的な質問項目としては、「指導者は選手たちの意見を尊重してくれた」、「指導者の指導は一貫していた」、「指導者はいつも熱心に指導していた」などである。調査協力者には、中学生・高校生時代に実際に指導を受けた指導者の中から特徴的な指導者を1名ずつ選択してもらい、各質問に示された内容についてどの程度あてはまるのかを「1：あまりあてはまらない～5：あてはまる」の5件法で回答を求めた。

#### (4) 統計処理

##### 1) 統計分析の対象データ

本稿ではA大学野球部員101名が中学生・高校生時代の指導者、計2名に関する回答を行ったため（ただし、1名は高校時代に野球部に所属していなかったのもので、高校時代の指導者については記入なし）、計201名の指導者に関するデータを得た。

##### 2) 因子構造の検討

指導者評価尺度の因子構造を検討するために、主因子法、プロマックス回転における、探索的因子分析を行った。因子数は2に設定し、因子を抽出した。また分類された因子は、それぞれ質問項目が同数になるように、因子負荷量が0.4以下の項目を削除し、再度因子分析を行った。分析には、統計ソフトIBMSPSSStatistics21を使用した。

##### 3) 尺度の信頼性と妥当性の検討

尺度の内的整合性を検討するために、各因子の信頼性係数（Cronbachの $\alpha$ 係数）を算出した。

### 3. 結果

#### (1) 指導者評価尺度の因子構造

15の質問項目に対して探索的因子分析を行った。抽出された2つの因子の質問項目が同数になるように、因子負荷量の低い項目を削除し、再度因子分析を行った。最終的に抽出された因子とその項目を表1に示す。

第1因子は、5項目で構成され、この因子で負荷量が高い項目は、「指導者は野球に対する知識が豊富であった」、「指導者の指導は一貫していた」などであった。指導者の野球競技に関する専門的な知識や技術などを表す項目であることから「専門性」因子と命名した。

第2因子は、5項目で構成され、この因子で負荷量が高い項目は、「指導者は練習や試合中に選手を励ましてやる気にさせてくれた」、「指導者はいつも熱心に指導していた」などであった。指導者の野球競技に関する専門的な知識や技術以外の指導者の人間性を表す項

表1 指導者評価尺度の因子分析結果 (筆者ら作成、2015)

質問項目	I	II	共通性
<b>I 専門性</b>			
指導者は野球に対する知識が豊富であった	1.046	-.291	.776
指導者の指導は一貫していた	.597	.172	.523
指導者はプレーに対して注意した後に改善策まで提示してくれた	.592	.203	.552
指導者の言動 (言葉と行動) は一致していた	.566	.224	.538
指導者は見本を見せてプレーの指導をしていた	.524	.118	.370
<b>II 人間性</b>			
指導者は練習や試合中に選手を励ましてやる気にさせてくれた	-.162	.897	.637
指導者はいつも熱心に指導していた	.184	.574	.504
指導者はレギュラー、非レギュラーに関係なく平等に指導していた	.042	.534	.316
指導者は一緒に活動(トレーニングやグラウンド整備等)していた	.018	.509	.271
指導者を信頼、尊敬していた	.398	.490	.657
因子負荷量	44.512	6.924	51.436

目であることから「人間性」因子と命名した。

## (2) 信頼性の検討

指導者評価尺度の各因子の信頼性係数 (Cronbachの  $\alpha$  係数) を算出した。信頼性係数は全体=.877、専門性=.841、人間性=.783であり、本尺度の信頼性を確認することができた。

## 4. 考察

研究1の手続きにより、「専門性」と「人間性」の2因子10項目からなる指導者評価尺度が作成された。作成された指導者評価尺度は因子負荷量も高く、高い信頼性を確保することができた。また、各因子は5つの質問項目から成り、短時間で調査を実施できることなど実践現場への導入も比較的容易に行うことができる。中学生・高校生年代は競技に関する専門的な指導のみではなく、全人的な教育も求められる。この年代の指導者を適切に評価する上でも、指導者の「人間性」に関する評価を測定できることは重要であると考えられる。

## IV. 研究Ⅱ

### 1. 目的

研究2では、研究1において作成した指導者評価尺度を用い、その結果とチームの特徴との関係について検討することを目的とする。

### 2. 方法

#### (1) 調査協力者

2012年10月現在、A大学野球部に所属する野球選手100名 (平均年齢20.28歳 $\pm$ 1.35、全て男性) である。

#### (2) 調査時期・手続き

A大学野球部の監督に事前にアンケート調査実施の許可を得た上で、2012年10月に集団法で実施し、その場で回収した。

#### (3) 質問紙の作成

##### 1) フェイスシート

対象者の付帯情報として、性別、年齢、競技歴、所属チームの種別 (学校の野球部・地域の野球チーム・その他の野球チーム・野球部に所属していない) について記入を求めた。次に、中学生・高校生年代のチームの部員数 (最大時)、週の練習頻度、一日の練習時間、ポジション、試合出場の

頻度、個人成績、チームの目標、チームの最高成績について記入を求めた。

## 2) 指導者評価尺度

研究1で作成した「専門性」、「人間性」の2因子から成る指導者評価尺度の測定のため10の質問項目への記入を求めた。

## 3) チーム特徴に関する質問紙

中学生・高校生時代のチーム特徴について問う9の質問項目の質問紙を作成した。具体的な質問項目としては、「チームには一体感があった」「選手全員がチームの目標達成に真剣に取り組んでいた」「チームのパフォーマンスに満足している」などである。調査協力者には、それぞれの年代のチームの特徴を思い出してもらい、各質問に示された内容についての程度あてはまるのかを「1：あまりあてはまらない～5：あてはまる」の5件法で回答を求めた。

## (4) 統計処理

### 1) チーム特徴に関する質問紙の因子分析

#### ①因子構造の検討

中学生・高校生時代チーム特徴に関する質問紙の回答によって得られたデータに関して、チームの特徴についての因子構造を検討するために、主因子法、プロマックス回転における、探索的因子分析を行った。因子数は3に設定し、因子を抽出した。また分類された因子は、因子負荷量が0.4以下の項目を削除し、再度因子分析を行った。

#### ②尺度の信頼性と妥当性の検討

尺度の内的整合性を検討するために、各因子の信頼性係数（Cronbachの $\alpha$ 係数）を算出した。なお、分析には、統計ソフトIBMSPSSStatistics21を使用した。

### 2) 指導者評価尺度の中学生・高校生の指導者間の比較

指導者評価尺度の得点を因子ごとに集

計し、中学生・高校生の指導者間の比較を行った。比較は「専門性」、「人間性」、「合計点」の3つについて行った。分析には、MicrosoftExcel2007を使用し、有意水準は5%とした。

### 3) 指導者評価尺度と競技成績の比較

対象者の中学生、高校生時代の最高成績を地区大会出場、県大会出場、全国大会出場の3群にわけて、指導者評価尺度の得点を因子ごとに集計した。比較は「専門性」、「人間性」、「合計点」の3つについて行った。分析には、MicrosoftExcel2007を使用し、有意水準は5%とした。

### 4) 中学生・高校生間のチーム特徴に関する評価尺度の比較

チーム特徴に関する評価尺度の得点を因子ごとに集計し、中学生・高校生間の比較を行った。比較は「チーム力」、「人間性向上」、「満足度」、「合計点」の4つについて行った。分析には、MicrosoftExcel2007を使用し、有意水準は5%とした。

### 5) 指導者評価尺度とチームの特徴に関する評価尺度の比較

指導者評価尺度とチーム特徴に関する評価尺度に関して積率相関分析を行った。それぞれ「専門性」、「人間性」、「合計点」と「チーム力」、「人間性向上」、「満足度」の因子項目を分析の対象とした。なお、分析には、MicrosoftExcel2007を使用し、相関係数が、0.0～0.2 はほとんど相関関係がない、0.2～0.4はやや相関関係がある、0.4～0.7はかなり相関関係がある、0.7～1.0は強い相関関係があると設定した。

## 3. 結果

### (1) チーム特徴に関する質問紙の因子分析

#### 1) 尺度の因子構造

9の質問項目に対して探索的因子分析を行った結果、3つの因子が抽出された。最終的に抽出された因子とその項目を表2に示す。



表2 チームの特徴に関する評価尺度の因子分析の結果 (筆者ら作成、2015)

質問項目	I	II	III	共通性
<b>I チーム力</b>				
選手全員がチームの目標の達成に真剣に取り組んでいた	.961	-.154	-.014	.747
選手間でお互いを認め合うことが多かった	.799	.001	.039	.670
チームには一体感があった	.760	.127	-.058	.675
チームやチームメートが好きだ	.586	.191	-.055	.490
選手間で互いのプレーについて指摘しあうことが多かった	.572	.051	.161	.482
<b>II 人間性向上</b>				
自分は野球のプレー以外での人間的成長が見られた	-.010	.821	-.030	.647
当時の経験は自分の今現在の生活に活きている	.064	.553	.069	.392
<b>III 満足度</b>				
チームのパフォーマンスに満足している	-.037	.005	.895	.775
個人のパフォーマンスに満足している	.066	.011	.504	.294
因子負荷量	43.273	8.713	5.475	57.461

第1因子は、5項目で構成され、この因子で負荷量が高い項目は、「選手全員がチームの目標の達成に真剣に取り組んでいた」、「選手間でお互いを認め合うことが多かった」などであった。チームの力を表す項目であることから「チーム力」因子と命名した。

第2因子は、2項目で構成され、この因子で負荷量が高い項目は、「自分は野球のプレー以外での人間的成長が見られた」、「当時の経験は自分の今現在の生活に活きている」であった。その時代の野球経験を経て人間的に成長できたかを表す項目であることから「人間性向上」因子と命名した。

第3因子は、2項目で構成され、この因子で負荷量が高い項目は、「チームのパフォーマンスに満足している」、「個人のパフォーマンスに満足している」であった。チームや個人のパフォーマンスに対する満足度を表す項目であることから「満足度」因子と命名した。

## 2) 尺度の信頼性の検討

尺度の各因子の信頼性係数 (Cronbach の  $\alpha$  係数) を算出した。信頼性係数は全体 = .850、チーム力 = .876、人間性向上

= .663、満足度 = .646 であり、本尺度の信頼性を確認することができた。

## (2) 指導者評価尺度の中学生・高校生の指導者間での比較

中学生時代の指導者の指導者評価尺度の平均点を算出したところ、「専門性」は17.26点 ( $\pm 4.87$ )、「人間性」は17.17点 ( $\pm 4.84$ )、「合計点」は34.42点 ( $\pm 8.84$ ) であった。また、高校生時代の指導者の指導者評価尺度の平均点を算出したところ、「専門性」は19.12点 ( $\pm 3.51$ )、「人間性」は18.65点 ( $\pm 3.56$ )、「合計点」は37.76点 ( $\pm 6.62$ ) であった。それぞれの項目で中学生・高校生間の  $t$  検定を行った結果、全て1%水準で有意差が認められた。それぞれの得点は図1に示した。

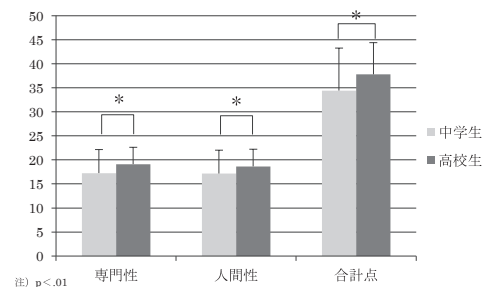


図1 指導者評価尺度<中学生・高校生の指導者間での比較> (筆者ら作成、2015)

### (3) 指導者評価尺度と競技成績の比較

まず、中学生、高校生時代の最高成績が地区大会出場、県大会出場、全国大会出場の3群にわけたところ、中学時代は地区大会出場が25名、県大会出場が42名、全国大会出場が26名、無記入は7名であった。高校時代は地区大会出場が34名、県大会出場が44名、全国大会出場が17名、無記入は4名であった。

次に、中学生時代の競技成績別に指導者評価尺度の平均点を算出した。それぞれの得点は図2に示した。それぞれの項目 t 検定を行った結果、「専門性」では、地区大会出場と全国大会出場で、「人間性」と「合計点」では、地区大会出場と県大会出場、地区大会出場と全国大会出場において5%水準で有意差が認められた。

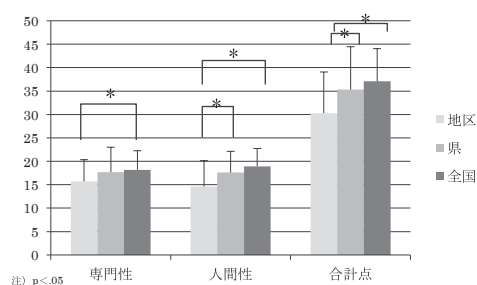


図2 競技成績別、指導者評価尺度<中学生>  
(筆者ら作成、2015)

次に、高校時代の競技成績別に指導者評価尺度の平均点を算出した。それぞれの得点は図3に示した。それぞれの項目で t 検定を行ったが有意差は認められなかった。

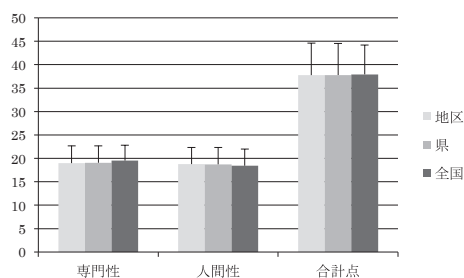


図3 競技成績別、指導者評価尺度<高校生>  
(筆者ら作成、2015)

### (4) 中学生・高校生間のチーム特徴に関する評価尺度の比較

中学生時代のチーム特徴に関する評価尺度の平均点を算出したところ、「チーム力」は18.26点 (±4.19)、「人間性向上」は7.71点 (±1.73)、「満足度」は6.66点 (±1.92)、「合計点」は32.63点 (±6.47) であった。高校生時代のチーム特徴に関する評価尺度の平均点を算出したところ、「チーム力」は21.11点 (±3.47)、「人間性向上」は8.48点 (±1.41)、「満足度」は6.80点 (±1.97)、「合計点」は36.39点 (±5.28) であった。それぞれの項目で中学生・高校生間の t 検定を行った結果、「チーム力」、「人間性向上」、「合計点」でそれぞれ、1%水準の有意差が認められた。それぞれの得点は図4に示した。

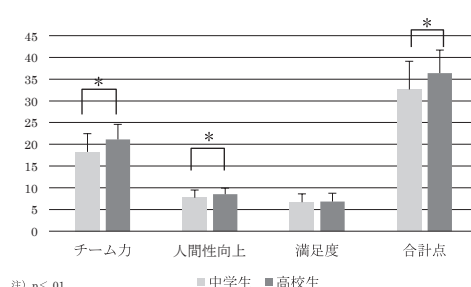


図4 チーム特徴に関する評価尺度<中学生・高校生間の比較> (筆者ら作成、2015)

### (5) 指導者評価尺度とチーム特徴に関する評価尺度の比較

指導者評価尺度とチーム特徴に関する評価尺度に関して積率相関分析を行った結果は表3に示した。

中学生の指導者においては、チーム特徴に関する尺度の「チーム力」で指導者評価尺度の「専門性」で0.42、「人間性」で0.42、「合計点」で0.46とかなりの相関関係が認められた。「人間性向上」で指導者評価尺度の「専門性」で0.65、「人間性」で0.54、「合計点」で0.65とかなりの相関関係が認められた。「満足度」で指導者評価尺度の「専門性」で0.30、「人間性」で0.30、「合計点」で0.33とやや相関関係が認められた。

高校生の指導者においては、チーム特徴に

表3 指導者評価尺度とチーム特徴に関する評価尺度との相関関係 (筆者ら作成、2015)

			チーム特徴に関する評価尺度			
			チーム力	人間性向上	満足度	合計点
指導者評価尺度	中学生	専門性	0.42	0.65	0.30	0.54
		人間性	0.42	0.54	0.30	0.50
		合計点	0.46	0.65	0.33	0.57
	高校生	専門性	0.35	0.35	0.21	0.40
		人間性	0.29	0.30	0.19	0.34
		合計点	0.34	0.35	0.21	0.40

関する尺度の「チーム力」で指導者評価尺度の「専門性」で0.35、「人間性」で0.29、「合計点」で0.34とやや相関関係が認められた。「人間性向上」で指導者評価尺度の「専門性」で0.35、「人間性」で0.30、「合計点」で0.35とやや相関関係が認められた。「満足度」で指導者評価尺度の「専門性」で0.21、「合計点」で0.21とやや相関関係が認められ、「人間性」では0.19とほとんど相関関係がなかった。

#### 4. 考察

##### (1) チーム特徴に関する質問紙の因子分析

分析の結果、「チーム力」、「人間性向上」、「満足度」の、3因子9項目からなるチーム特徴に関する評価尺度が作成された。作成されたチーム特徴に関する評価尺度は因子負荷量も高く、高い信頼性を確保することができた。また、研究1で作成した指導者評価尺度と同様、3つの因子で9つの質問項目から成り、短時間で調査を実施できることなど実践現場への導入も比較的容易に行うことができると考えられる。

##### (2) 指導者評価尺度の中学生・高校生の指導者間での比較

中学生・高校生の指導者間で指導者評価尺度の「専門性」、「人間性」、「合計点」の得点について比較を行った結果、全ての項目で高校生の指導者の得点が、中学生の指導者の得点を上回っていることがわかった。また、全てt検定により有意差が認められた。中学部活動では高校部活動に比べ、野球未経験者の指導者の割合が高いこと、また高校野球は甲子

園を目指すという明確な夢を持ち教員になり野球指導を行う指導者の割合も多いことから、指導者評価尺度の得点においてもこのような差が見られたことが考えられる。さらに、今回の調査対象者であるA大学の野球部員の大半は県内でも比較的競技力の高い高校野球部に所属していたため、やる気と指導力に長けた指導者の指導を受けてきていることが今回の結果にも影響を与えたと考えられる。

##### (3) 指導者評価尺度と競技成績の比較

中学生・高校生時代の最高成績をそれぞれ地区大会出場、県大会出場、全国大会出場の3群にわけ、競技成績別に指導者評価尺度の平均点の比較を行った。

中学生では、「専門性」、「人間性」、「合計点」ともに地区大会出場と全国大会出場で有意差が見られた。また、「人間性」、「合計点」では、地区大会出場と県大会出場でも有意差が見られた。しかし、高校生においては指導者評価尺度と競技成績に有意差が見られなかった。高校野球では競技力向上のために「ひと・もの・カネ・情報」などの資源を豊富に持つチームとそうでないチームとで大きな差がみられる傾向にあり、指導行動（専門性・人間性）よりも、マネジメント行動が競技結果に強く影響を与えることが推測される。本稿の指導者評価尺度においては「専門性」と「人間性」の2つの因子からしか指導者を評価することは出来ず、指導者としてふさわしい能力を全て測定したとは言えず、今後のさらなる調査により精巧に指導者の能力を測る尺度の作成を行っていくことが求められる。



#### (4) 中学生・高校生間のチーム特徴に関する 評価尺度の比較

中学生・高校生間でチーム特徴に関する評価尺度の「チーム力」、「人間性向上」、「満足度」、「合計点」のそれぞれの得点を比較したところ、全ての項目で高校生の得点が、中学生の得点を上回っていることがわかった。また、「チーム力」、「人間性向上」、「合計点」の差はt検定により有意差が認められた。

このことから、甲子園という明確な目標に向けてチームが一致団結して戦う傾向が高校生年代の方が強いことから、チームに対してポジティブな印象を持っていることが推察される。しかし、「満足度」を高めるためには、「チーム力」の向上や「人間性向上」だけではなく、最終的な勝敗やチーム・個人のパフォーマンス発揮などの競技力の向上は欠かせないことが示唆された。

#### (5) 指導者評価尺度とチームの特徴に関する 評価尺度の比較

指導者評価尺度とチーム特徴に関する評価尺度に関して積率相関分析を行った結果、高校生年代の指導者の指導者評価尺度の「人間性」とチーム特徴に関する評価尺度「満足度」以外の項目は相関が認められた。この結果から指導者の能力はチーム力の向上や選手の人間的成長、部活動に対する満足度にポジティブな影響を与えていることがわかった。しかし、全ての項目において中学生の指導者の方が高校生の指導者よりもチームの特徴に対して強い相関関係が認められた。この結果から、高校生よりも中学生の方が「チーム力」や「人間性向上」、「満足度」などに対して指導者の能力に依存していることがわかった。

また、「満足度」に関しては中学生・高校生共に、「チーム力」、「人間性向上」などに比べて相関が弱い傾向にあった。「満足度」は、「チーム力」や「人間性向上」に比べて、指導者能力以外の要因、例えば競技成績や練習環境などさまざまな要因により判断されることが示唆された。

#### V. 本稿の課題

本稿の課題としては、調査対象者がA大学野球部員に限られていたことが挙げられる。対象者はすべて大学まで野球を続けることのできる比較的競技レベルの高い選手たちであり、中学生、高校生の間に野球が嫌いになり辞めてしまったもの、他競技へ移行したものなど、様々な野球部員への調査が今回の研究では行われていない。また、対象者の出身学校、特に出身高校は比較的競技レベルが高く、指導力が高くやる気に満ちた指導者から指導を受けてきたことが予想される。これらのことから、今後は様々な競技レベルの指導者に関するデータを増やしていくことで、指導者評価尺度の信頼性を向上させていきたい。さらに、本稿ではアンケート調査による量的研究であったが、指導者へのインタビューなどを通じた質的研究（西阪、1997・フリック、2002・佐藤、2006・小田、2012）を行うことでより指導者に求められる能力に迫っていききたい。また、本稿においては、選手の指導者に対する評価から指導者評価尺度を作成していった。しかし、競技結果や自分が納得する起用をされたかどうかなどが、指導者の評価へ与える影響は少なからずあると考えられる。今後はより多面的に指導者を評価することができるよう、指導者同士で互いに評価できる尺度の作成も目指していきたい。

#### VI. 今後の展望と日本スポーツ界への貢献

本稿でも述べたように、2013年の部活動体罰問題を発端に日本スポーツ界は危機を迎えている。一方で、2019年にはラグビーのワールドカップ<sup>5)</sup>、2020年には東京オリンピック・パラリンピックと日本においてスポーツ界が注目するビッグイベントが開催されることが決まっている。ラグビーは2016年リオデジャネイロオリンピックから正式競技として復活することも重なり、日本国内でも盛り上がり

5) 第9回ラグビーワールドカップが日本で開催される。アジアでの初めての開催となる。北海道、岩手、宮城、埼玉、東京、神奈川、静岡、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡、長崎、大分、熊本で試合を開催予定である。

を見せ始めている。小学校の体育においてもタックルなどの激しい接触のないラグビー<sup>6)</sup>が導入され始めており、ワールドカップ、そしてオリンピックでのメダル獲得に向けて、今後ますます指導者の養成が必要となってくるだろう。また、日本は2020年の東京オリンピックでのメダル獲得世界3位を目標に掲げて国をあげてスポーツの強化に取り組んでいる。男女サッカーや体操・トランポリン、水泳などのメダルの取れる可能性の高い競技においても、指導者の養成が求められるだろう。本稿において作成された指導者評価尺度の使用は現段階では野球競技に限られているが、今後も上記に挙げた競技などで調査を継続していくことで様々なスポーツでも用いることができる指導者評価尺度を作成していきたいと考えている。

2014年に開催されたテニス全豪オープンでの錦織圭選手の活躍は日本国民を熱狂させた。また、独占中継を行った有料放送チャンネルの加入者を過去最高にさせ、契約する用具メーカーの株価が向上するなどスポーツが経済に与える影響は計り知れないといえよう。2019年のラグビーワールドカップ、2020年の東京オリンピックに向けて、スポーツ界、そして経済を盛り上げるためにも、スポーツを支える指導者の養成に関わる研究を今後も続けていきたい。

## VII. まとめ

本稿の目的は、中学生・高校生年代の指導者の能力を評価する尺度を作成すること、その尺度とチームの特徴との関連性を調査・分析することで指導者として求められる能力を明らかにすることであった。調査の結果、以下の知見が明らかになった。

- 1) 指導者評価尺度は、「専門性」と「人間性」の2つの因子から構成された。全人的な育成が求められる中学生、高校生年代の指導者の資質として、競技の「専門性」だ

けでなく「人間性」も求められることがわかった。

- 2) 中学生の指導者より、高校生の指導者の方が、「専門性」、「人間性」とともに優れていることがわかった。しかし、指導者評価尺度と競技成績に有意な関係が認められたのは中学生のみであった。
- 3) 指導者の「専門性」、「人間性」の能力は共に、チーム力の形成や人間的成長、部活動への満足度に貢献していることがわかった。しかし、高校生よりも中学生の方が指導者の能力に依存していることがわかった。

## 参考・引用文献目録

- Chelladurai & Saleh, "Dimensions of leadership behavior in sport: Development of a leadership scale", *Journal of Sport Psychology*, vol.2, 1980, pp34-45.
- 藤森立男「組織の公式構造がキャリアと業績に及ぼす効果」『心理学研究』第63巻4号、1992年、273～276ページ。
- 藤田依久子「学習プロセスの心理学一心と身体相互関係の考察」『環境と経営』(静岡産業大学) 第15巻第2号、2009年、59～76ページ。
- 藤田依久子「身体行動と精神世界の相互関係ーとらわれのない生き方へー」『静岡産業大学情報学部研究紀要』第12巻、2010年、327～347ページ。
- 藤田依久子・吉井奈々「コミュニケーションの前提としてのホスピタリティ」『環境と経営』(静岡産業大学) 第19巻第2号、2013年、69～80ページ。
- 藤原誠・堺賢治「スポーツ少年団の指導に関する研究」『愛媛大学教育学部紀要』第22巻第2号、1989年、67～75ページ。
- ブリック・小田博志ほか訳『質的研究入門ー〈人間の科学〉のための方法論』春秋社、2002年。
- 服部勝人『ホスピタリティ学のすすめ』丸善、2008年。
- 平野浩「池田謙一(著)、『コミュニケーション』、2000年、東京大学出版会」『社会心理学研究』

<sup>6)</sup> ラグビーリーグを基に開発された、主に年少者・初心者向けの競技。プレイヤーの腰にある「タグベルト」を相手に取られると、ラグビーにおけるタックルの変わりとなる。

- 第16巻第3号、2000年、195～196ページ。
- 鎌原雅彦・竹網誠一郎『やさしい教育心理学（第3版）』有斐閣、2012年。
- 金堀哲也「野球の打撃指導におけるコーチと選手の変容に関する事例的研究～内省を中心に～」『筑波大学大学院人間総合科学研究科修士論文』、2010年。
- 川村卓「特別寄稿 指導者を目指す野球コーチング学の講義から」『Baseball Clinic』2013年5月号、2013年、40～43ページ、ベースボールマガジン社。
- 川村卓『バッティングの科学』洋泉社、2014年a。
- 川村卓『ピッチングの科学』洋泉社、2014年b。
- 川村卓『キャッチャーの科学』洋泉社、2015年。
- 高民定・温琳・藤田依久子「韓国済州島における言語景観——観光と言語の観点から」『人文社会科学研究』（千葉大学）第30巻、2015年、1-23ページ。
- 馬見塚尚孝「少年の野球肘予防への提言—全力投球禁止、投球強度制限、盗塁禁止、指導者ライセンスなど」『Sports Medicine』No.145、2012年、14～21ページ、Book House HD。
- 松尾知之「野球指導者の分類に関する preliminary study—投球動作指導の観点から」『第5回身体知研究』2009年、13～16ページ。
- 松尾知之・平野裕一・川村卓「投球動作指導における着眼点の分類と指導者間の意見の共通性：プロ野球投手経験者および熟練指導者による投球解説の内容分析から」『体育学研究』第55巻、2010年、343～362ページ。
- 文部科学省編『私たちは未来からスポーツを託されている』学研パブリッシング、2013年。
- 西阪仰『相互行為分析という視点—文化と心の社会的記述』金子書房、1997年。
- 小田博志「エスノグラフィー教育の現場から」『感性工学』第11巻第1号、2012年、29～32ページ。
- 小方涼子「所属感と集団効力感が方略と課題への興味に及ぼす影響について」『研究年報 学習院大学文学部』第49巻、2003年、251～262ページ。
- 佐藤郁哉『フィールドワーク：書を持って街へ出よう』新曜社、2006年。
- 清水均『サービス業のためのホスピタリティコーチング』日系BP社、2004年。
- Smith, R.E., Smoll, F.L., & Curtis, B. *Psychological perspectives in youth sports*, Washington, DC, Hemisphere, 1978, pp173-201.
- Smith, R.E., Smoll, F.L., & Hunt, E. “A system for the behavioral assessment of athletic coaches”, *Research Quarterly*, vol.48, 1977, pp401-407.
- 総務省統計局『日本の統計2015年版』、2015年。
- 高橋義雄「Jリーグにみるセカンド・キャリア・サポート（特集スポーツ・キャリア）」『体育の科学』第61巻第9号、2011年、673～677ページ。
- 武田正樹・藤田依久子『個と集団のアンソロジー—生活の中で捉える社会心理学』ナカニシヤ出版、2011年。
- 田中靖政『コミュニケーションの科学』日本評論社、1969年。
- 田中靖政「21世紀の日本は大丈夫か：「情報」と「コミュニケーション」の歴史的視点から考える」『学習院大学法学会雑誌』第27巻第2号、2002年、47～69ページ。
- 植屋清見・内藤浩正「野球スポーツ少年団団員の体力・運動能力・投能力の発達とその望ましい指導のあり方の検討」『日本体育学会大会号』41B、1990年、464ページ。
- 吉田幸司「アスリートのセカンドキャリア支援の現在」『現代スポーツ評論』第18巻、2008年、133～137ページ。

## 参考URL

公益財団法人日本高等学校野球連盟  
[http://www.jhbf.or.jp/data/statistical/index\\_koushiki.html](http://www.jhbf.or.jp/data/statistical/index_koushiki.html) (平成27年3月25日現在)

## 探討棒球教練類型與球隊特徵之關係 — 以初中及高中學校棒球教練為對象 —

藤 田 依久子・野 本 堯 希

### 論文摘要

本研究旨在1) 制定日本初中與高中學校棒球教練的評估標準，以及2) 釐清該標準與球隊特徵的關係。本研究對101名大學棒球員的問卷調查數據進行分析，繼而制定包含「專業水平」及「人性關懷」兩大元素的教練評估標準。研究發現，於初中該標準與球隊表現有莫大關聯。此外，該標準顯示球隊實力、球員的個人成長及棒球會成員對球會活動的滿意度之間，存在顯著的關聯。

關鍵詞：評估標準、教練、球隊特徵、初中及高中生

## 探讨棒球教练类型与球队特征之关系 — 以初中及高中学校棒球教练为对象 —

藤 田 依久子・野 本 堯 希

### 论文摘要

本研究旨在1) 制定日本初中与高中学校棒球教练的评估标准，以及2) 厘清该标准与球队特征的关系。本研究对101名大学棒球员的问卷调查数据进行分析，继而制定包含「专业水平」及「人性关怀」两大元素的教练评估标准。研究发现，于初中该标准与球队表现有莫大关联。此外，该标准显示球队实力、球员的个人成长及棒球会成员对球会活动的满意度之间，存在显著的关联。

关键词：评估标准、教练、球队特征、初中及高中生

# A Study on Relations of the Type of the Coach and the Characteristic of the Team in the Baseball Coach to Junior High Students and High School Students

Ikuko Fujita • Takaki Nomoto

## Abstract

This research is conducted with objectives of 1) developing evaluation criteria of baseball coaches in junior high schools and high schools in Japan and 2) clarifying the relationship of the criteria and team specialties. Analyzing the data of the questionnaire obtained by 101 baseball players in universities, the coach evaluation criteria is developed with two major factors of professionalism and humanity. Significant relationship is found between the criteria and the team performances in junior high schools. Furthermore, the criteria indicates meaningful relationships among team strength, personal growth of the players, and satisfaction levels of the baseball club activities.

Key words: evaluation criteria, coach, team specialty, junior high school and high school students



